

寫した部

加倉井家の記録

此の方が長持ち
すると思ふ

千九百八十三年一月半ばより降り出し、また雨は休む間もなく降り続き
三月下旬になりまして、おままだ降り続き、居り百年來の大雨の年といはれ
サシタクララ平原の東南の山ふところにあります。アシダインゴウは
瀧水となり、さながらナイヤガラ滝の如くにカヨテクリキにあふれ出し
カヨテクリキの下の方桑港灣に近い地方は、四ヶ処も堤防が切れ、アルビソ方面は
洪水となり、アルビソの町は、水も水中に入り、居り總立ち退きの災難にめぐり
あつて居ります。今自分等の住まつて居ります処は、ミルピタスの町の
山の手よりの高台にありますので、其の難はまぬがれました。
ミルピタスのババレイシンの前に自分等の畑でありました。最初の地主でありました
パイオニアババー家の二世のローレンスさんが、昔私に話された事でした。が
自分の子供の時であつたが、大雨続きの年、馬も牛も、ハスチヤーから比呂
ビーンの中に、かゝまつた事があつたが、それは馬も牛も、足がぬかり、こけ
動けなくなつたため、ためたつたこの事でありました。が、丁度今年の雨は
その時と同じように降り、繞つて居るの、いなりかと思われ、ます。
雨中のつれづれに、昔の名々の事を思い出して居る時、此のアメリカに來たにより
深き、雨縁にむすばうれ、居りました。故に、加倉井豊長トササ氏の事どもを
自分の記憶にある處に、と思ひ、此の度ここに書き記しておきます。
加倉井氏は、茨城県、水戸市の名家の出身であられました。氏の兄上は
水戸の第一銀行の頭取りを、ながう、務められた方であり、ます。とら、す
又、曾祖父は、徳川幕府末期、江戶の頃の漢學者であり、翁の私塾より
①多くの傑出したる、人達が輩出、明治維新の大業が、なご、げられ、
遠因ともなつた事と、信じ、いられます。
明治天皇は、それを、おぼしめ、て、水戸天皇より、正三位の贈位に
あづか、うれて、賜、うれる、と、う、で、あり、ます。

加倉井豊長氏は、米國に留学、され、アメリカが、すきに、な、う、れ、て、其の、ま、ま、
アメリカにとどまつて、しま、わ、れた、方、で、あり、ました。

越賀師と父がスタンフォード大学での仕事を得られ学校の地下室で二人で自炊を致し乍ら働いて居られた時加倉井氏は留學中であられよく地下室をたずねられお心穿くなつたのだと云てあります

千九百十四年に父が越賀師の奨助を得られ千九百〇七年よりの渡米以来の希望どおりになりましたセロリ作りをアルビソで始められました。父はサンタクララバレイのセロリ作りのパイオニアであります其の後で

加倉井氏は越賀師と父をしました時アルビソに引き移つて暮られアルビソの元老岩崎氏のアッポルランデで仕事をこして居られました

アルビソはセロリを作るにはよいところでありましたそうですが毎年のように大水になやまされるのでものと水の出ないブイの近くにあり畑がないものかとさかーあるきミルピナスよりのカヨテクリキの西側ぞいのシルバースさんの若い梨畑の仲にセロリの間作を始めて居られた年に私がアメリカにやつて参りました

千九百十九年かぞえ年十七歳の時でありました。セロリのキのれも一通りすんだ合間に加倉井様のお世話で私も山崎様のアッポルとりの仕事をさせて参りました

其の後加倉井さんはネブラスカ州で加細子爵家出であり牧師であります

かたわら曲辰場の經理官をして居られました加細家の曲辰場近くで共同者を得られ引取られて牧畜業を勧められましたか千九百廿年代の大不況の時加州に切り上げて参られましたそれから間もなく子供の時からのいゝなづけてあられたいとこの加倉井ふみ子様とお結婚されたために一時帰国されました再渡米をされたの世話で野マリン百性を勧められましたか第一世界大戦勲章、印家をまもめてコロラド州のデンバー市近くに立退いて居られました

終戦後は南加ガートナー市に居るかまえられまゝから一一家お揃いでミルピナスをおたずねり参りました

と父の御葬式の時には遠くよりわざわざおいで下され其の後又一一家お揃いでと父のお墓参まりにおいで参りました

とありかたし事と何時も思つて居ります

おしくも七十五歳で却他界になりました。が、二十二年教会での
お葬式には物も参列させていたとまじりました。

加倉井ふゆ子様は、私が今此の書を書いたため、居るはず三年四月初旬
御病氣中から御長女男のジヨウさん御夫婦に見守もられたらう
お平安な日送りをおぼし居られますようでありますので、私の女男男の
都合のよき次第是非共一度おつかがりせねばと念じ先にかつて居ります。

私が加倉井様からお聞きした事を此処に書きとめておきます。

加倉井氏の家系は源氏の真流でありますと云うです。

御先祖は源義家殿の弟新羅三郎源義光殿の三男

政紀井や郎さねなが殿であられると云うであります。

其の当時奥州に勢力をひろげて居りました(名前を失念しました阿部一族ではな
なかつたかと思ひ此処ではかりに阿部貞遠(宗遠)一族として語ら進めます)

奥州は遠方の事でもあり京都の朝廷よりの敕諭にも再三こたわらずに
居りましたため、天皇の敕命により源義家殿が將軍となり兵を引きつれての

遠征となり阿部一族が天皇の命令にしたがふ事を約束として京都に
凱旋されたえを前九年の役といふたのではないかと思ひます。

ところが其の後で阿部一族が再び謀叛を起しました(再び敕命により)

源義家殿が二度目の遠征となった。これを後三年の役といふたのではと思ひます。
後三年の役の時には前もつて阿部一族が朝廷の回りの反對黨の権力者となつて
組立満全の準備をしての謀叛でありました。ために義家殿は非常な苦戦と

なり京都の朝廷に再三援軍の送り出さる要請されましたが途中中

皇女の回りの反對黨の権力者等によりにぎりつぶしにされて居りために

天皇の旨にどがすに居りました。弟の新羅三郎源義光殿は義家殿の
苦戦の程を思ひついてもたつても居られぬ程の心配で敕諭をまちきれずに一族

郎黨を引きつれて義家殿の援軍としてはるばる奥州にはせま多し居りました。
により戦勝となり阿部一族が二度と立ち上る事の本末はよりようにと徹底した
仕置きをされて義家殿は京都に凱旋をなされたのだと云うてあります。

しかし下ら弟の日義光殿は救誅をまたずに一族郎黨を引きつれて東下りさせられた事に對し臣對黨がどのように動くかといふ事を思ひはかられ、族を相談の上關東から甲州・信州一舟に散り散りになり自立たゆ抑土着する事になつたところこそ其時加倉井氏の先祖にあたる源義光殿の三男波紀井や郎さねなが殿は甲州(山梨県)の山の仲の波紀井の庄におうかれ波紀井の性を名のうれたのだと云ふてあります波紀井や郎殿は日蓮聖人に帰依され自分の持ち山ごありました、身近山を聖人に寄進された方であるところでもあります

当時日蓮聖人は大變な迫害を受けつゝあられましたので波紀井や郎殿は護身用にと源家の寶刀を献上されました聖人はそれを佩き柄頭に数珠をかけられ山の登り下りをされて居られたので其の寶刀を数珠とよばれて居りましたところこそ日蓮聖人のお弟子さんに日シヨウさまといふ方がありましたこのお方はご盲目であられたところこそ日シヨウさまもえらく迫害を受けつゝあられたので波紀井や郎殿はこの日シヨウさまをお守りされるためにひとかたに水戸在に移られる前を(かゝれて居る)加倉井とがえられたのだと云うてあります

時代が移りかほりそれから四世期程後徳川幕府の世となり黄門さま(徳川光圀公)が水戸の領主とせられた時より加倉井家の其の当時の祖先さまの所え其が故にまたられたと云うてあります ある時黄門さまが加倉井家の大子石長屋戸の外にありました楠の木の大木を見られ自分ごもらいたいの事ごなになさるのござかりましたすわられました時これにて日本一の大太鼓を作りたいとの事ごをきんで差上られたのだと云うてあります

黄門さまが楠の大木をもらわれた御札にとお獅子に自筆で札を書かれたものが生家(加倉井家)に保存してあるといふて居られました 加倉井家が日本に居られた子供の時代には其の大太鼓は水戸の公園に大木にしておかゞつてありましたと云うて居ります

日蓮聖人の御弟子さまの日シヨウさまの書ひがれました 十南無妙法蓮華經といふかりものもあるがめんらであられたのでヤイななめになつて居るといふて居られました

波紀井方郎殿が日蓮聖人に獻上されました源氏の寶刀數珠丸が
明治の世になりましてかう何時の間にか身延山から安永を消してしまひ

日本全国に渡りさがされて居りましたが見つからずに居りましたそうです
加倉井がネブラスカ州から切り上げて来られ日本に一時帰られる予定で
あられた其の前に一時ミルピタスの私共がエブルさんの畑を借り其の仲に
建てたキャンピングで私共と共に過して居られました時日米新聞紙上に
數珠丸の寶刀を日本の刀劍の博士がこちらでそれを見出されて
日本にもち帰られたといふ事が出て居りました それを見られて

加倉井様は今迄私がかきつらぬました加倉井家の昔の事を残らず
私に話して聞かせて下されましたので私は自分の事のようにしつかりと
おぼえておきます

加倉井家の家紋と私共武田家の家紋は同じ四ツ葉であります
日蓮聖人と親亦鳥聖人とはほぼ同じ年代の方であると思ひます

竹相山に居城を築いて居つた高梨氏は源頼朝と同族で近い血縁であつた事
私共の先祖が高梨氏とは何かの縁故により兄弟二人で一族を引まつれて
竹相山の北側の地続きである竹原部落を開拓して定住あまりはばらずに
竹原系剛健の昔者し方をして居つたように思われるには何か理由があつた
のいけなつかと思われぬ事

浄土真宗佛教の開祖親亦鳥聖人の御母上は源頼朝のいとこであつた事は
歴史上に記されてあり藤原家でもあまり上位になり家の人と結婚された
間に聖人はお生れになり早久から佛門に入られた方でありました

当時の皇室の廻りの権力者たちにより宗門の事で師の法然聖人と併に
流罪となられ親亦鳥聖人は越後の高田に流罪とさせられました
聖人の一番目のお弟子さんは高田に流罪となられて居られた時に
お弟子となられた方であると聞いて居ります

聖人は其の後罪を許されられて晩年は京都にお帰りになられ
九十歳でおなごなりになつて居ります

聖人のおんくなりになられた時一番目のお弟子さんも京都に居られとして
お聖人の御曾をわけてもらわれて越後の高田に御歸りになる途中
和善の先祖竹原の大本家で一冬を過ごされてから高田に歸られて
御寺を建てたから檀下にといふ事こそこの檀下になつたのだと父から
聞いて居りますが此のお寺さまが浄土真宗高田派の本山浄光寺の関甚全
さまであるとの事でもあります此のお寺さんが前からの知りあいでなく卒然と
竹原の大本家をおたすわになるわけは全く和善も源氏の流れであり前々から
親善御聖人とも何かの御縁を知りあいであつたのではとも考えられます？
何と何かう河直源氏に深い縁が宣はつて居るではありませんか？

和善の先祖が高梨氏の居城である竹山に就いて居る竹原に定住した時代と
波紀井や郎殿が波紀井の庄におちつかれた年代と同時代といふ事になり
人にはあまり知られぬよう名前もかえて居られたといふ事を思ひこの刀メリ刀に於て
はからずも加倉井孫と深いおまじわりを得た事を思ひ新羅三郎源義光殿が
東評を得ずにやむなく東下りをされて義家殿の援助に行かれ戦には勝たが
京都に帰れずに一族が散り散りにちほうに別れておし着したといふ事を考へ
和善の先祖も源義光殿との目に見えない縁のつながりがあつたのではないかと
あらぬ想像も頭のゆに浮び出て参りますが加倉井孫もそれではなつかと

いつて居られました大本家の何代目かの時盛夏の虫ほしにと倉から出て隠れ
傳束の刀と糸圖ともども何者かもちさられてしまつたと聞いて居る其の後大本家
ではタウフシの時昨男の屋から失火主家も細家も倉も全焼全部の記録を
焼失してしまつたときいて居るまじり又高田の浄光寺も大正年間の高田の寺町の
大火の時類焼の災にあひ全焼其組の記録も焼失してしまつたと思わねばなりません
年をとりひまをて遊ぶと色々とお夢の持な思ひに一人でひたる事か多くなり
思つた事聞いた事等書きつづりました所参考迄にと

千九百二十三年三月一日満八十一歳の誕生日を記念して

故武田富壽 次男武田昌二 謹んで大正記す

加州サンノゼ市の富居に於て